

アナリザ・トゥラサッティ

オメロ触覚美術館

私はイタリアの小さな町、アンコーナから来ました。今回お話しするオメロ触覚美術館は、アンコーナ出身のアルド・グラッシーニ、ダニエラ・グラッシーニ夫妻の発想と熱意によって、21年前に創立されました。二人とも全盲です。旅を愛し、旅先で美術館を訪れることを楽しみにしています。二人が鑑賞するには、手で触察する必要がありますが、ご想像のとおり、ほとんどの美術館では許されません。美術鑑賞が趣味なのに、それをやってはいけない、と言われたらどんな気持ちになるか、想像してください。二人にとって、美術鑑賞は、喜びであり、楽しみであり、他の人との交流のきっかけなのです。それにもかかわらず、数年前まで触察による美術館賞はほぼ不可能でした。美術館の建築上の障壁ばかりでなく、感覚のバリアがあったのです。

視覚障害者は、視覚で鑑賞することはできません。でも、手を使えば鑑賞できます。ですから、美術品にアクセスできる、つまり享受できるようにすることが大切なのです。オメロ触覚美術館の創設には、アンコーナ市やイタリア盲人連合の協力があり、身体障害者への援助金も使われました。創立当時から、教育普及を目的とするだけでなく、実際に美術品を所蔵する美術館であること、そして、あらゆる人が鑑賞できるミュージアムであることを理念としていました。数年後には、国全体にとって有意義だと認められ、現在では、イタリアの文化財・文化活動省の予算を受けて運営しています。開設当初は小さな規模でしたが、2年前から、より大きなステージに移転を始めています。

五角形のこの建物は、1700年代半ばに建てられました [fig. 1]。海を埋め立てて出島のように建てられており、もとは、検疫のために人や動物や荷物を一時隔離するための施設でした。数年前から、アンコーナ市の文化的イベントに使われており、その一部が、オメロ触覚美術館です。当館では、いろい

ろな鑑賞コースを用意していますが、その中には、この建物自体を、視覚だけではない複数の感覚で鑑賞するものもあります。この建物の歴史を、手でさわったり、音を聴いたり、香りを通して、感じるのです。



fig.1 オメロ触覚美術館がある建築
(レクチャーライドより)

まだ内装が完成していませんが、現段階ではエントランスは写真のようになっており [fig. 2]、緑色の台の上に、この五角形の建物の木製の模型が置かれています。視覚障害者の方は美術館に入るとすぐに、自分がどんな建物の中に入ってきたか、触察してわかるようになっていました。模型や、レリーフにした平面図を置くことは、この美術館への迎え入れの段階で、視覚障害者の方にとっても役立ちます。



fig.2 オメロ触覚美術館のエントランス
(レクチャーライドより)

アルド・グラッシーニ館長は常々、迎え入れが大切だ、と言っています。よい迎え入れとは、ぎこちなさを感じさせない。そして、同伴者にではなく、視覚障害者、あるいは弱視の当事者に直接話しかけ、お互いに自己紹介しあって、名前をしっかりと覚えることが大切です。また、その障害が先天性のものか、後天的なものかについても確認しておきます。色や図像、場所についての記憶があるかどうかも大切だからです。

通常、視覚障害者の方の鑑賞は、予約制で、スタッフが1対1で案内します。グラッシーニ夫妻が自ら案内する場合もあります。この二人は、美術品が大好きなあまり、二人だけで鑑賞すると先を争ってケンカになってしまうことがあります。美術館によっては、警備員とケンカになることもあります。二人はオメロ触覚美術館の展示品だけでは満たされません。夫妻が「平和的な革命」と言っているように、世界のあらゆる美術館で、触察できる部分を設けていきたい、と願っているのです。

こちらは、ギリシャ彫刻の部門です [fig.3]。当館で最初に展示したのが、こうしたギリシャ美術の名作の複製です。ほとんどが実物大です。これらのオリジナルは、世界各地の美術館にバラバラに所蔵されていて、実際、いっぺんに見ることはできません。そう考えると、当館の展示は、美術史部門の立体触覚百科事典のようです。これらの複製は、視覚障害者の方の鑑賞のために用意されたのですが、学生や、一般の美術鑑賞をするすべての方にとっても、非常に興味深いものです。品質の高い複製なので、美術全集や、パソコンの画面で見ると、はるかに深い鑑賞ができるのです。これらは、年代を追って鑑賞でき、また、「人体」や「女性像」といったテーマごとの鑑賞コースをつくることも可能です。作品ごとにキャプションがあり、点字の記載もあります。点字の部分には角度をつけられ、触察しやすくなっています。



fig.3 ギリシャ彫刻を紹介する部門
(レクチャーライドより)

自己紹介の後、腕を組んでご案内するので、すぐにとっても緊密な関係が生まれます。ご案内する私たちにとっても、印象深い体験です。触察にはかなりエネルギーを要するので、ひとつのコースで鑑賞するのは、10点から12点ほどに絞ります。視覚によ

る鑑賞はとても速いので、午後に来て50点くらい見ることもできるでしょう。でも、視覚は表面的になりがちで、間違いもあり、それに忘れてしまいやすいのです。触覚による鑑賞では、感覚をゆっくりと使わなくてはなりませんから、おのずから時間をかけて、深く鑑賞することになります。そして、実際に触れる、ということは、とても近い距離にあるということです。触るのは、食べるのに似ています。自分の体の一部とする、一体化するのです。触って、心地よいとき、あるいは不快なときは、おなかをずしんと来るような感覚を得ます。

視覚障害者の方は、平衡感覚をとるのが難しく、自分が動いてしまう場合がよくあります。ですから、触察するときには、対象となる彫刻作品の上に入った両手を置きます。そうすると、安定した感覚が得られ、そして、その瞬間から、触察が始まります。一度目は、手早く彫刻の全体を触察します。全体像をおおまかに把握するためです。いったん下まで行ったら、もう一度いちばん上に両手を戻して、今度は時間をかけて、細かい部分を触察していきます。細部や、それぞれの細部の位置関係、あるいは、人の顔であったら、その表情を触察するようにします。人にもよりますが、細かい情報をどんどん付け加えて、充実させていくのです。

触察によって、すべてを見ることができます。手に限界はないのです。手によって、くまなく鑑賞することができます。眼でも同じですが、手による触察も、まずその方法を学んで、訓練する必要があります。ちょうど、スキャナーでスキャンするように、自分の前にある作品がどのようなものか、認識できたときを見計らって、その作品の作者や歴史、様式について、案内するスタッフからお伝えします。

ミケランジェロの傑作のような、名作を鑑賞し、深い感動を体験する方がいます。イタリアの有名な美術品、特にルネッサンス期の美術品は、ほとんどが宗教と結びついています。視覚障害者の方が、人生で何度教会に足を運ばれ、ミサなどに出席されることか。それでも聖母マリアや、キリストの表情が描かれた絵画を見た経験はないのです。だからこそ、宗教的な像を触察する体験は、ほんとうに必要な、望まれていることなのです。愛している人、大好き

なもの、私たちは触りたくなりますよね。触察される方に、私たちも気づいていなかった細かな点を教えられることがあります。背の高い彫刻でも、いちばん上手に手が届くように、キャスト付きの台も用意してあります。

当館には名作の複製ばかりでなく、現代美術のオリジナル作品もたくさんあります。現代美術の作品には、具象だけでなく、抽象もあります。しかも、さまざまな素材がありますから、フォルムとマテリアルの関係を理解するのにとても役立ちます。作品を選ぶとき、私たちは素材についてもよく吟味しています。それぞれの素材には歴史があります。特に小さい子どもには、それがどこから来たものか、教えてあげる必要があります。木や、大理石や、金属。私たちは、素材にはそれぞれの「声」がある、と表現していますが、素材には特有の音があります。聴診器のような道具で、その素材の音を聴いてみることもあります。外観よりもっと深いものを鑑賞するのが、私たちの考え方だからです。たとえば、ある彫刻を一見してあまり興味がわかなかったとしても、触ってみれば気が変わるかもしれません。その「声」を聴いてみたら、もっと新たな発見があるかもしれません。このようなエクササイズを子どもや学生と行うのは、視覚に頼りすぎている場合があることに気づいてもらうためです。

子ども達のためには、例えば、動物の像を選んで触察するコースもあります。美術館を森に見立てて、動物探しに行くようなコンセプトです。子ども達には、コース設定とご案内はしますが、あまり縛ってはいけませんね。はじめに、みんなで輪になって、向かい合って座ってもらいます。シンプルに思えますが、子ども達に集中してもらうにはよい方法です。子ども達は、自発的ではなく、ご両親や先生に連れられて美術館に来ているのですから、輪になって自己紹介をした後は、美術館とはどういうところなのか、説明します。小さい子どもには、美術館は、〇〇とは違いますよ、という語り口で。たとえば、学校ではないですよ。動物園ではないですよ。サーカスでもありませんよ、というかたちで説明します。ほとんどの子どもは、ミュージアムというと、

恐竜を展示してある博物館のようなものだろう、と思っているようです。どういう場所かを理解してもらったうえで、まず美術館自体を説明し、次にオメロ触覚美術館の特別な歴史について説明し、そして、おうちの近くにこの特別な美術館があって良かったですね、と話を進めていきます。

そして、五感をすべて目覚めさせる活動をはじめます。体を動かしたり、お友だちや自分の肌をなでたり、香りや味を聞いたり。あるいは、箱の中に入れたさまざまな素材にふれて、その違いを感じるといったこと。こうしたシンプルな活動の組み合わせが、鑑賞のよいウォーミングアップになります。子ども達には、この美術館を、特別なジムのように経験してほしいと思います。筋肉を鍛えるジムではなく、感覚を目覚めさせるためのジムです。その後、鑑賞が始まります。子ども達には、みなさん探偵になったつもりで、でも虫眼鏡はいりませんよ、あらゆる感覚を敏感にして鑑賞してください、彫刻はどのような素材でできているか調べ、その素材の声に耳を傾けてください、と伝えます。

中学生くらいからは、目隠ししたうえで鑑賞するコースがあります。楽しさと、深い思考。両方がうまく組み合わせられた鑑賞方法です。子どもは、事前に長い話をしても、ほとんど聞いてくれませんので、短い話のあとに鑑賞をはじめます。二人組になり、一人は目隠しをし、もう一人は同伴して案内する役になって、ロールプレイング式に鑑賞を行います。一組ずつ、彫刻の前に連れていきます。触察の方法について簡単な説明をします。同伴役は、つねに目隠しをした人の近くに居て、存在を感じさせる程度に接触するようにします。目隠しをすると、視覚以外の感覚からの情報が、目を開けているときよりも強く感じられるので、混乱しがちです。はじめての体験ですから、神経質になったり、逆に笑ってしまったりします。私たちはその時点では介入せず、しばらく自由にさせて見守ります。お互いに反応し、お互いを信頼しなければなりません。こうした体験のあと、座ってお話をはじめます。いきなり抽象的な話をするより、実体験の後のほうが、ずっとよくわかるからです。体験した後のほうが、視覚障害者が

どのような感覚を持つのか、あるいは、なにを必要としているのかわかる。そして、視覚障害に対する意識が高まる。感覚が研ぎ澄まされるのです。

大人の健常者に対してもこのような鑑賞コースは用意されています。触察によって、より時間をかけて、より深い鑑賞をする体験ができると思います。週末を楽しむ家族連れなどで、特に特別な鑑賞コースを希望されていない場合でも、積極的に鑑賞していただきたいので、記入式のシートをお渡しすることもあります。鑑賞後に、何か新しい考えを持って、一般的な美術館とは違う鑑賞体験をしたと感じてもらえるように、常に意識しています。家族連れは来館者の多くを占めていて、学校の見学で訪れた子ども達のご両親を連れてまた来てくれるケースがとて多いです。それから、学生や大人も対象とした、触察本というツールをつかった鑑賞、ワークショップがあります [fig. 4]。



fig. 4 ワークショップで子どもがつくった触察本
(レクチャースライドより)

ところで、イタリアではあらゆる子ども—健常者も、身体障害者もみんな、普通学級に入ります。特殊学級ではなく。約40年前から、こうした「統合教育」のモデルが実施されています。障害者の方には、特別な訓練を受けたアシスタントがつきます。健常者と身体障害者がいっしょに教育を受けることは、とても大切です。障害者は、ほかの人と一緒に生きていく術を学びますし、健常者の子ども達も、世の中には様々な状況を抱えた人がいることを感じ、ともに生きる方法を学び、成長するからです。

私たちは、多様性が、豊かさのひとつのあらわれである、という信念を持っています。そして、視覚障害者のために考案された手段が、教育の場で、あらゆる人のために役立つ場合があります。この触察

本では、普通の黒字に加えて、点字が印刷されています。登場人物ごとに、素材を使い分けて、レリーフでさまざまな登場人物が描写されます。見て美しく、触察しても素敵、という、あらゆる人が楽しめる本なのです。日曜の午後に家族を対象としたワークショップ、折り紙のワークショップもしました。このようなツールはあらゆる方が使えるものです。

近年では、聴覚障害者を対象とした活動も行っています。実際、難聴の女性がリードしている活動があります。彼女は建築家で、実際に働いています。障害者が、普通の暮らしをしている、ひとつの例です。たくさんの言葉を使って説明するよりも、実際に存在している人を示すほうが、よりよく理解できます。

どんな年代の方でも、素材としてよく使うのは粘土です。難しい技術がいらないので、簡単にワークショップを始められます。さわって感じた友達の顔や、あるいは自分の顔を粘土で作ったり、あるいは自分の顔を作ったりします。視覚障害者対象でも、健常者の子どもや大人のワークショップでも使います。それから、リサイクル品を使うこともよくあります。モノは、かたちと素材によって特徴づけられており、そのどちらも大切ということを感じ取るワークショップです。

子ども達が触察本を作るワークショップもあります。まず、素材をよく認識することから始め、文字を書くのではなく、素材によって自分の思い描くストーリーを語る—素材をあらたな伝達言語として使うのです。大人の障害者を対象としてこうしたワークショップをする場合もあります。全体で数か月に及ぶ長期のプロジェクトとして行い、最後に、卒業作品のような展覧会、あるいは、お芝居のようにして発表します。

「感覚のトーテム」というプロジェクトにも力を入れています。触覚美術館がイタリアにひとつ、存在することは大切ですが、そこで行っていることを、美術館の外に出て普及させるのもとても大切だと思っています。例えば、参加を希望した学校に、歴史的な建造物をひとつ選ばせます。これはアンコーナ市で最も重要な教会です。学校の生徒が陶器でその模型をつくりました。そして、この建物に

ついでの情報やマップをレリーフにして、触察本をつくりました。ということは、この建物を象徴する、つまりトーテムのような、インフォメーションポイントが、建物の中に作られたわけです。こうしたプロジェクトを、若い生徒や学生たちと行うことは、非常に有意義です。それほど費用もかかりません。そして、この建物に入る方は、どなたでもこれを利用でき、そして、当館の存在、活動を知っていただくきっかけとなるのです。これもまた、視覚障害者のニーズに応じて用意されたものが、あらゆる人のために役に立つひとつの例です。

現段階では、視覚でしか鑑賞できない美術館でも、まずは眼を通して、触察のときのような鑑賞を心がけることもできるとでしょう。例えば、その彫刻がどのような素材からつくられているのか、質問します。温かいのか冷たいのか、重いのか軽いのか、無垢なのか中空なのか、どこの原産の素材なのか。かたちや色だけに注目するのではなく、いろいろな感覚に注意して、集中して鑑賞することができます。視覚障害者の方に、その作品について説明する場合を意識して、どのような形容詞が適切か、とか、どうすれば、作品の本当の印象とか感覚を伝えられるのかを考えながら鑑賞すると、眼だけの鑑賞にならないのです。

こちらは、点字を書くためのボードです。このワークショップでは、ご自身の名前を点字で書けるようにします。特別なアルファベット、魔法のアルファベットのような感覚で、子どもに覚えてもらいます。点字のタイプライターもあります。それから、コンピュータにつないでプリントできるプリンタもあります。

図像や写真をレリーフにする「触図」というものがあり、他の美術館のためにも制作しています。まず、元の図像を触察しやすい図像に解釈しなおし、簡略化してから触図にする必要があります。色の違いは、面のテクスチャーの違いで表現します。特殊な「カプセルペーパー」を機械で熱処理し、レリーフにします。ペーパーに描いた黒い部分が熱で膨れることで、レリーフになります [fig. 5]。もう一つの方法として、樹脂製のシートを熱の作用で山型に

する機械もあります。たとえば、実際のスプーンから、スプーンのレリーフがつくれます。建築の一部もレリーフにできます [fig. 6]。視覚障害者でない、あらゆる学生・生徒にも有用なものです。そして、イタリアの視覚障害の学生は、このような教育用の補助教材を買えるような補助金を、毎年一定額支給されています。フィレンツェの大聖堂のような歴史的な建造物をよく理解するためには、視覚障害者はこのような触図を必要とするのです。

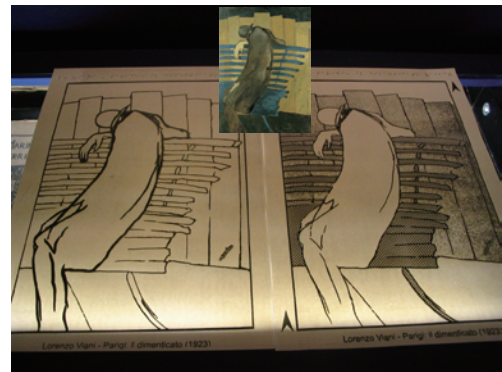


fig. 5 カプセルペーパーをつかった触図 (レクチャースライドより)

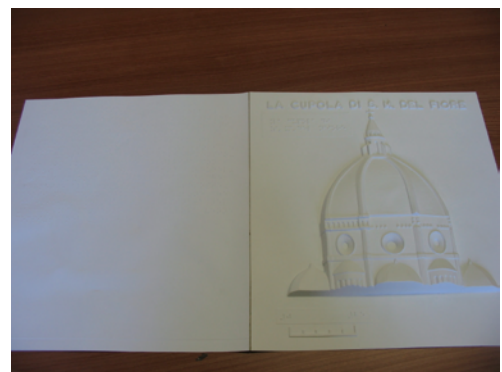


fig. 6 真空成型機をつかった触図 (レクチャースライドより)

模型も役に立ちます。小さな縮尺の全体の模型も、細部を触察できる大きな模型も必要です。実際、建築学部や工学部の学生たちもたくさん当館を訪れます。模型の大部分はハンドメイドなので、当館の展示物のなかでも、最もお金のかかっているものでもあります。こちらは、パンテオンの模型です。内部も触察できるようにカットされたかたちの模型もよくあります [fig. 7]。建築を理解するのに非常に役立つので、展覧会に貸し出しの要望も多いです。シンプルな、ヴォリュームを理解するための模型もあります。幾何学的なフォルムをもとに組み立てられていることがこれでよくわかります。

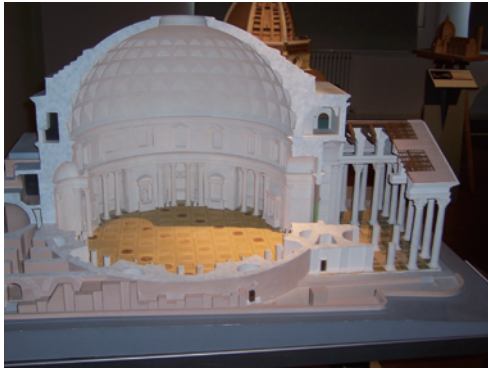


fig.7 内部も触れるようつくられた模型
(レクチャースライドより)

弱視の方のためのツールもあります。当館の対象として、弱視の方も重要なひとつのカテゴリです。視覚障害といっても、いろいろなケースがありますよね。たとえば、弱視の方には照明の選び方が非常に重要です。パネルやキャプションが光を反射しないこと、活字は大きく、背景と活字のコントラストがはっきりしていることがとても大切です。パソコンをつかって、インターネットとつなげて点字で読むことができる機器もあります。若い視覚障害者のみなさんは、IT 機器をよく活用していて、いろんなことに自由にアクセスしています。携帯電話や、ソーシャルネットワーク、タブレット端末、一般的な若者と同じように、そういうものに接しています。

こちらは、新しくて、しかも大事に考えているプロジェクトで、美術館から外に出て行くものです。当館は、創設当初から音楽にも大きな関心を払ってきました。夏のコンサートの企画を13年来続けています。2年ごとに、アルテンシウメ (Arte insieme) という美術コンクールを開催しています。アルテンシウメとは、いっしょにアートということ。学校や美術館、音楽学校などの単位で参加します。イタリアオペラの大きな野外劇場との協力関係も継続的に行っていて、今年から新しいプロジェクトを始めます。今年の夏から、オペラごとに音声の解説がつきます。それから、劇場の平面図や、舞台装置のデザインをレリーフで用意します。さらに、視覚障害者と同伴者を対象として、特別な、3種類の企画を用意しています。一つ目は、舞台裏への訪問です。衣裳部屋で衣裳にさわったり、あるいは楽屋でメーキャップ用品に触れていただいたりします。二つ目は、オーケストラボックスに行き、オーケストラに出会う、

という企画。もう一つは、舞台にあがって、舞台美術の装置の中に身を置いて、それを触察できる企画です。

このようなアプローチは、ある必要性から生まれた解決策ですが、人によってさまざまな必要性がある。異なる必要性に応えるために、さまざまな異なる解決策が生まれてくる。文化によっても違うと思いますけれども。さまざまな文化から生まれるさまざまな解決策が、私たちを豊かにし、豊かな経験を与えてくれるのです。アルド・グラッシーニ館長が話しているように、もとは視覚障害者のために生まれた美術館ですが、現在では、私たちを含めて、あらゆる人の役に立つ、示唆に富んだ美術館として、さまざまな方たちに鑑賞していただいているのです。